



## 二つの「共同研究」（和光大学総合文化研究所十年誌：1995-2005）（総合文化研究所の十年に思うこと）

著者	原田 勝正
雑誌名	東西南北
巻	2006
ページ	346-347
発行年	2006-01-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1073/00003366/">http://id.nii.ac.jp/1073/00003366/</a>

# 二つの「共同研究」

**原田勝正** 和光大学名誉教授

わたくしは和光大学在職中と退職直後に、二回共同研究をまとめる作業を経験した。

その二回とは次ぎのようなものである。

## 1. 東京・関東大震災前後

同名の論文集として、1997年9月1日日本経済評論社から刊行。編者原田勝正・塩崎文雄、筆者は上記2名以外に

奥須磨子（当時明海大学講師、現在本学経済学部助教授）

老川慶喜（立教大学教授）

小関和弘（本学人文学部教授）

古賀史朗（当時東京都立大学大学院生）

この共同研究は1991年にはじめた学内外の混成参加者によるもので、関東大震災が東京の近代化だけでなく、他のいくつかの面でも時代の画期をなしていなかったかといった問題意識に立つものであった。自然災害はともすると、改良、進歩の契機とされることが多い。しかし、ここでは関東大震災の場合はどうだったかという疑義がある共通の問題意識として流れていた。『読書新聞』系の書評で、このような問題意識を指摘していただいたことがあり、編者としては感謝と同時に胸をなでおろす思いを抱いた。

しかし、そこからの問題深化は、その後積極的になされないまま終わった。それは共同研究の本来のあり方から逸脱しているという思いをぬぐいきれないものがある。

## 2. 「国民」形成における統合と隔離

同名の論文集として2002年3月30日日本経済評論社から刊行。編者原田勝正、筆者は編者を含め以下の9名。

橋本堯、佐治俊彦、山村睦夫、ユ・ヒョジョン、内田正夫、松永巖、福島達夫、以上本学専任教員（福島は2000年退職）。ほかに当時中国社会科学院文

学研究所研究員の孫歌。

この共同研究は三つの柱、すなわち

アジアと日本の思想

東アジアにおける国家と民族

「国民」の統合と隔離

から成り、前二者では日本をアジアとかかわらせて考える立場（ に属するユ・ヒョジョン論文は極東ロシアにおける人種問題をテーマとしている ）に立ち、 で日本を軸とする観点を構成した。

全体としてこの共同研究には、最初から首尾貫通する問題意識が十分に練り上げられていなかった。共同研究グループの名称も、「十九世紀末研究会」としていた（1995年発足）。そこでは問題意識の立て方でかなり異なる研究者が、近・現代史にまたがる問題を、できるだけアジアにコミットしつつ展開させるという共通の意志が結成の動機としてはたらいっていたのである。そして1999年11月本学のシンポジウム「二つの世紀末と日本・アジア」ではメンバーの二人が報告し、この100年の間の日本とアジアとのかかわりの変化をどのように考えるべきかという点について、参加者から活発な意見が提起された。しかし報告者のひとり（原田）は、現状を起点として考えるときの現状の把握が弱いと、100年前の問題点を十分に把握しきれないのではないかという危惧をつよく抱いた。

その危惧は、このシンポジウムから二年余り後に、この論文集をまとめるまでの間、つねにつきまとっていた。しかしここにはもうひとつ問題があった。すなわちアジアにコミットしながらしかもそのうえに「国民」を分析軸の中心に据えるとき、その「国民」はアジアとどうかかわらせていくべきか。この点について十分な討議がなされないままに、論文のまとめに入ってしまった。結果としては二つのテーマ アジアと国民 を未消化のまま論文集を出してしまったという悔恨が残された。いまでも「国民」という重いテーマが澱のように意識される。

（はらだ かつまさ）